

不靈である。箇様なものが何しに身心具足した人間をなや  
 ます事が出来るものぞ。此の道理を考へても直に知れたこ  
 とである。若し幽霊、怪物、鬼神、上帝、天狗なども此心あれば。此  
 身あるものとすれば。一種の衆生である。一種の動物である。  
 彼等も必だ。眼耳鼻身意の六識がある。色聲香味觸法の六  
 塵がある。識と塵とが相對して。始めて内外の分際が立つ。こ  
 れが心境と云ふ二法である。即ち物と我とである。此心に此  
 物を愛するが順境である。此心に此物を憎むが違境である。  
 此の違順の二境があれば。意業が動く。口業を作る。身業を作  
 る。さすれば假令鬼神、上帝、天狗、幽霊、怪物なども彼の十善戒

を護らねばならぬ。若し破戒すれば。性功徳を喪ひて。地獄に  
 も墮つべき事とである。若し此心もなく。此身もなく。此口も  
 なきものと云へば。以上無きものである。されど幽霊、怪物、鬼  
 神、上帝、天狗など云ふ名がある。名があれば。何かあるべき筈  
 である。と妄想するものゝ爲に云へば。うれば有るに相違は  
 ない。彼れへ彼れの心がある。彼れの身がある。彼れの口があ  
 る。されど此の人間の目には見じぬ。耳には聞じぬ。彼れは彼  
 れの身口意で。善惡の業を作り。自業自得の果報を引て。生々  
 世々輪廻するである。假令人間の仲間に混雜して。威福を求  
 むるも。人間の果報を受けて。人間に生れ來たるまでは。それ

はならぬ事である。此の道理を能く憶念して。幽霊、怪物、鬼神、上帝、天狗などを成敗すべきことである。今試に彼等を成敗して見ると斯うである。幽霊へ丸まかし愚痴なものである。貪欲なものである。人を恨み世を怨みて死せるものが幽霊と云ふ衆生である。其の口業を作るを見よ。いつでもうらめしやの繰言である。不貪欲戒も。不瞋恚戒も。不邪見戒をも破りしものである。箇様な愚痴深きものは幽霊ばかりでも無い。目のあたり随分澤山ある。殊更不思議とするに足らぬ。怪物は。其の本體、本性を顯はさぬものである。能く種々に形を變化して。人を誑かす。是れも愚痴なものである。人を誑かす

積りで己の本體、本性を失ひ己を欺き人を欺きて。途轍もなき事よ。苦勞とするものである。妄語、綺語、兩舌、惡口である。此外に藝は無い。此の怪物も目のあたり澤山なものである。殊更不思議とするに足らぬ。鬼神、上帝なども種々な意業、口業を造る。多くは破戒の姿である。天狗と云ふ衆生は殊更に瞋恚の強き衆生である。鬼神、上帝の類が日本にては大概天狗である。しかし是は今日人の妄想する處より成敗するおとである。其實多くは出家の墮落せしものが天狗になると云ふおとである。半僧坊、三尺坊、僧正坊など云ふ名前も悉く坊主の名である。されど支那天竺の坊主は墮落しても天狗には

ならぬものと見ゆる。彼方の書物には天狗と云ふ衆生がある事は見ゆ。これは日本に限る事である。されど今時は天狗にもなりかぬと見えて墮落せしものも。大概天狗の眷屬である。昔の天狗を擔ぎ廻りて口すぎをする名づけて護法神と云ふ。奇怪千萬の事である。日蓮宗には題目がある。淨土宗には彌陀がある。天台真言には觀音や不動や大師がある。禪宗は無一物で何も無い。そこで近來天狗の古手を擔ぎ出して。口そぎの助とするは。大概禪宗である。箇様な破戒無慚なものも祭りて護法神など云ふ。沙汰の限りである。總じて十善戒の一部を破りても惡は惡である。惡を作るもの

は神にもあれ。人にもあれ。其徳の全からぬ。固よりの事である。貪欲を起して物を貪り。瞋恚を起して人を惡み甚しきハ罰を與へて。己が威福をなすは。暴惡と云ふものである。此の人間の中でも。少し心得のあるものは。せぬ事である。神なればとて許すべからぬ。箇様な惡を作す神は。惡神である。人間なみくものより。卑劣の神である。下等の神である。箇様なものには。近付かぬがよい。取合ぬがよい。近付たとて。利益ハ無い。遠ざけたとて。彼より申分もない。なま中につまき立をせると惡い。先斯う考へても。成敗の出來る事である。耶蘇教の神は。斯う云ふて居る。我の外別に神あるべからず。

我は妬の神である。若し他の神を祭り崇むときは大に傾りて罰を與へ汝の子孫三四世にまで及ぼせど斯うである。隨分不都合な申分である。他の神のあるを承知して我の外に別の神あるべからずと云ふは大妄語と云ふものである。若し他の神を祭り崇むときハ罰を與へると云ふは不愼悲戒を破りしのみならず人の三四世まで害を及ぼすの罪惡は此神がみつから受けて地獄にも墮つべきものとである。我は妬の神なりと怒鳴りて愚痴を云ふは恐ろしき山の神である。下等卑賤の者の女房でも少し志のよきものは言はぬ事である。箇様なものゝ相手には成らぬがよい。耶蘇の言ふた

事にも斯うしたとがある。我の來るは太平をなす爲ではない。我の來るは我を起す爲である。我の來るは人をして其父を疎ましめ女をして其母を疎ましめ婦をして其姑を疎ましめ而して人の敵となるものも我の家來である。故に父母を愛するものと我に過るものは我によろしからず。子女を愛するものと我に過るものは我によろしからず。其命架を任て我に従はざるものもまた我によろしからず。其命を全せんとするものは却て命を失ふ。我が爲に其生命を捨てるものは反てこれを得ると斯うである。是れは彼れの教法と弘むる爲に言ふとであれど隨分毒のある申分である。

此の書は、神の御心を記し、人々の心を導くものなり。其の旨は、神の御心を記し、人々の心を導くものなり。其の旨は、神の御心を記し、人々の心を導くものなり。

此の書は、神の御心を記し、人々の心を導くものなり。其の旨は、神の御心を記し、人々の心を導くものなり。其の旨は、神の御心を記し、人々の心を導くものなり。

彼れが奉ぜる神がみづから稱して妬の神と名乗るくらゐなれば終には箇様な大邪見な事を云ふに至るにさるにより。此耶穌教が其むろし西洋諸國に攪入流布をとるときも大概は一たび軍が起りて國なれば爲に滅亡し血で血を洗ふて今日に至り人々教法より生むる害を恐れてあまり取構はぬやうよなつた事である。回々教なども概ね此途轍である。宗教の信徒を以て兵隊を組立る仕構である。此事は今日の日本人へ承知して置くがよい。夢中になりてアーメン。アーメン言ひて祈り立ると都表もなき事を祈り出すである。一寸とした迷から永く我國人の災害の種子を播き置くとは。

扱も不仁な事である。少々文字もあり世の中に學者とか言はるゝものにも此類がある。我國にも近頃は段々威が衰へてあれど。八百萬神とて随分神々も澤山ある。彼れエホバが來て此神々を一々打潰すまでには随分混雜も生ずべき事である。佛法も微力ながらある。神佛が加護して此國を守りてある中は耶穌の申分通りに軍事も起るべきとである。神佛の勢を見て降参はせぬ流義である。討死するまでは其國を護る意地がある。此事は通途のものは侮て居れど。其時節が到來すると神威佛徳といふものが現はるゝものである。何千年と云ふ間人々の頭腦に染み込し事なれば一朝一夕

の談にあらざ。慎み畏るべき事である。神と云ふも。つまり一種の法である。此法が立つと。意識で分別せる故に。善神も立つれば立つ。悪神も立つれば立つ。一神を立て。多神を取除けば。是も人間の分別通り。勝手になるものである。多神を立て。一神を打倒せも。其通りである。天地山河乃至。家屋器物さへも。人間の妄想より生起せるほどの事なれば。況て目にも見ぬ事を。妄想すれば。果しの無き事である。されば。従前より在來りものは。左程人間に害さへなければ。強ちに打潰す事も入らぬ。況て正直の神を立つれば。自然と人間の心念も正直になる。正法を念ずれば。其念が。

其儘正念である。心と法と。一致である。昔の言に。神は正直の首よやどると云ふてある。此等は面白き言分である。昔の人は。深く此の道理を知りて。立てもせぬ。潰しもせぬ。善神は善神として。おれを崇敬する。悪神は悪神として。これを遠く。何も神と云ふ言葉に付て廻りはせぬ。善悪の上を分別して。これを成敗せる。此等は古實の有るものである。今時の者は。神と云へば。善悪の差別もなく。一概に畏るゝものもあり。一概に打潰すものもありて。共に邪見に墜るである。紀の貫之の土佐日記にも。梶取の心は。即ち神の御心なりとある。これは何も知らぬ梶取の言ふに任せて。住吉の神に幣物を奉り。

而して船の危難を免れしによりて、扱も梶取の心が直に神の御心であると悟られた言葉である。奥ゆかじき心底である。誰も知る歌に「心だに誠の道に叶ひなば、祈らざとも神や守らん」と此等も面白きことである。元來神は人間を守護するが職分である。外に尊き謂れは無い。手早く云へば、巡査が夜晝非常を警しめ、人の安寧を守護するやうなものである。此の世の中に破戒無慙の惡神がありて、喜怒を恣まゝよして人を害する。そこで善神が晝夜目を見張りて、此の惡神を退治して、常に恒に國家人民を守護せらるゝ。うれも縁もゆかりも無き他國の神が、箇様な面倒を見るものでは無い。

必ぞ其國に縁起した神に限る事である。親兄弟朋友にして、必ず我が幸福を祈る。見もせぬ知りもせぬ人は、此事は無い。されば安心えて、正直に職業を營み、人事を盡しさへすれば、別に祈らざとも神の守りへ有るべき事である。祈れば惡人でも守る。祈らされば、善人でも守らぬと云ふは、邪神である。左様な不都合の神は、片隅の方へ押し除けて置くべき事である。是も伊弉諾神のやうな國の大切の神なれば、おれを祭り、機嫌を取りて置くべきである。家のうちの愚痴深き老母の如きである程よく取扱ひて、苦勞させぬがよい。神代の巻の中にも種々な邪見の神もある。此の人間の有様と別に

易らぬ面白き事である。此の世界は、妄想の世界である。此の  
 妄想の中に、天上人間も建立してある。生死禍福も、つまり妄  
 想なれば、正邪是非の沙汰も入らぬやうなものなれど、此の  
 妄想の外に、一法の取るべきものも無きによりて、此の妄想  
 が實際である。故にこれを差排して、正さねばならぬ。夢に苦  
 痛を感じる時は、夢中ながらに、一生懸命である。況て現在に  
 此事がある。うれを打捨て置くべきにあらず。猶此事を論じ  
 れば、千萬無量の事なれば、一心法界の道理を、能々思惟して、  
 人々悟るべき事である。一切の物事に推し通じて、面白き事  
 限りなし。穴賢。

眞正 無神論三 大尾  
 哲學



跋

此の書は。我が師の君の。西洋の旅の疲れをやしなはん  
とて。熱海の温泉に物したまひし時。おのれ清丸に。口ば  
から授けたまへる御誨言を。承はるまに。寫し出た  
るものなり。固より鈍き筆なれば。活きたる言辭の。いき  
なりを寫しそこなへるは更なり。二週間ばかりの旅の  
すさびに。物したまひしとぞなれば。説き洩らされしふ  
しも。また多かりなん。されど。かゝる高尚なる。所謂不思議  
分際の事どもも。女らにはべにも。解りやすく。説き諭  
したまへるは。是なん師の太慈大悲にはありける。おの

れも。わかきほどより。御國漢國の人どもの著したる鬼神の典籍を讀みて。聊か思ひよれるふしの無きにしもあらざれば。早くより暇あらん時には。思ふむねを。書きあらはさばや。と思ひたりしを。今この御書を授かりては。豫ての望も満ち足らひて。嬉しきこと言はむかたなし。されば一日もはやく。此の大慈大悲を。賤の男賤の女までに被ふらしめて。所謂無始の無明とかいへる心の闇を打破りて。真如の月の。さやく明らけく。世をわたらせまほしく思ふあまりに。やがて印刷には付せり。漢土の蒼頡が。初めて文字を製りし時よ。鬼神の哭き悲しみ

けりとなん。聞傳へたりしを。今この書の世に出なば。上帝鬼神天狗幽靈怪物等の。己が世界を打碎かれて。愁ひさまよひ歎き號ばんさまを。文明の今日よ見んおその。をかしさよ。樂しさよなど。つぶやきつゝある折しも。印刷の事卒へたりと。告げおあせたりければ。嬉しさのあまり。一言書きつけぬ。」

明治二十年八月上旬

門人

川合清丸誌

明治二十年六月二十八日版權御願  
同年七月九日版權免許  
同年八月五日出版發兌

定價金三十拾錢

著者

東京府華族 鳥尾小彌太  
小石川區關口町百九十二番地

出版人

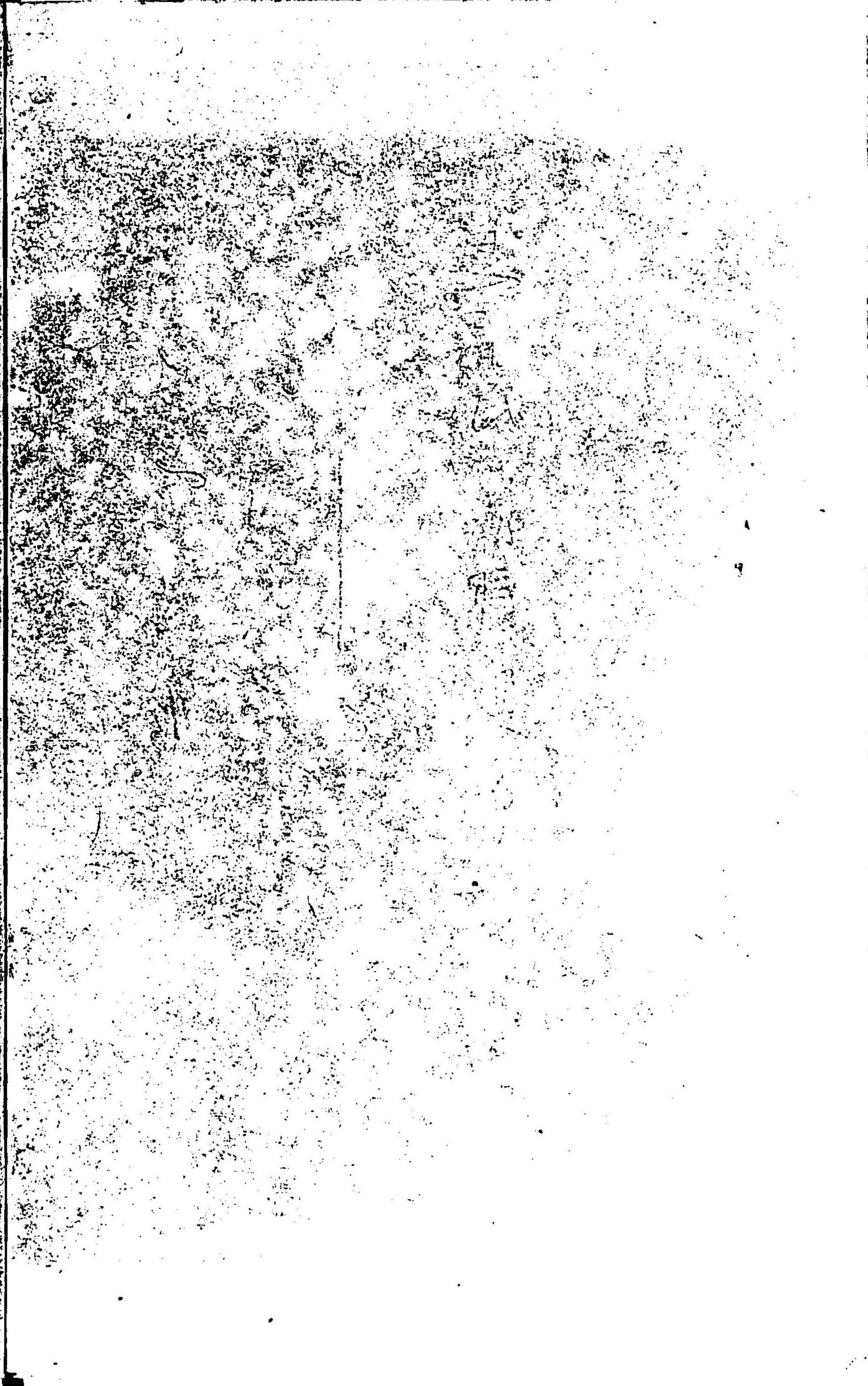
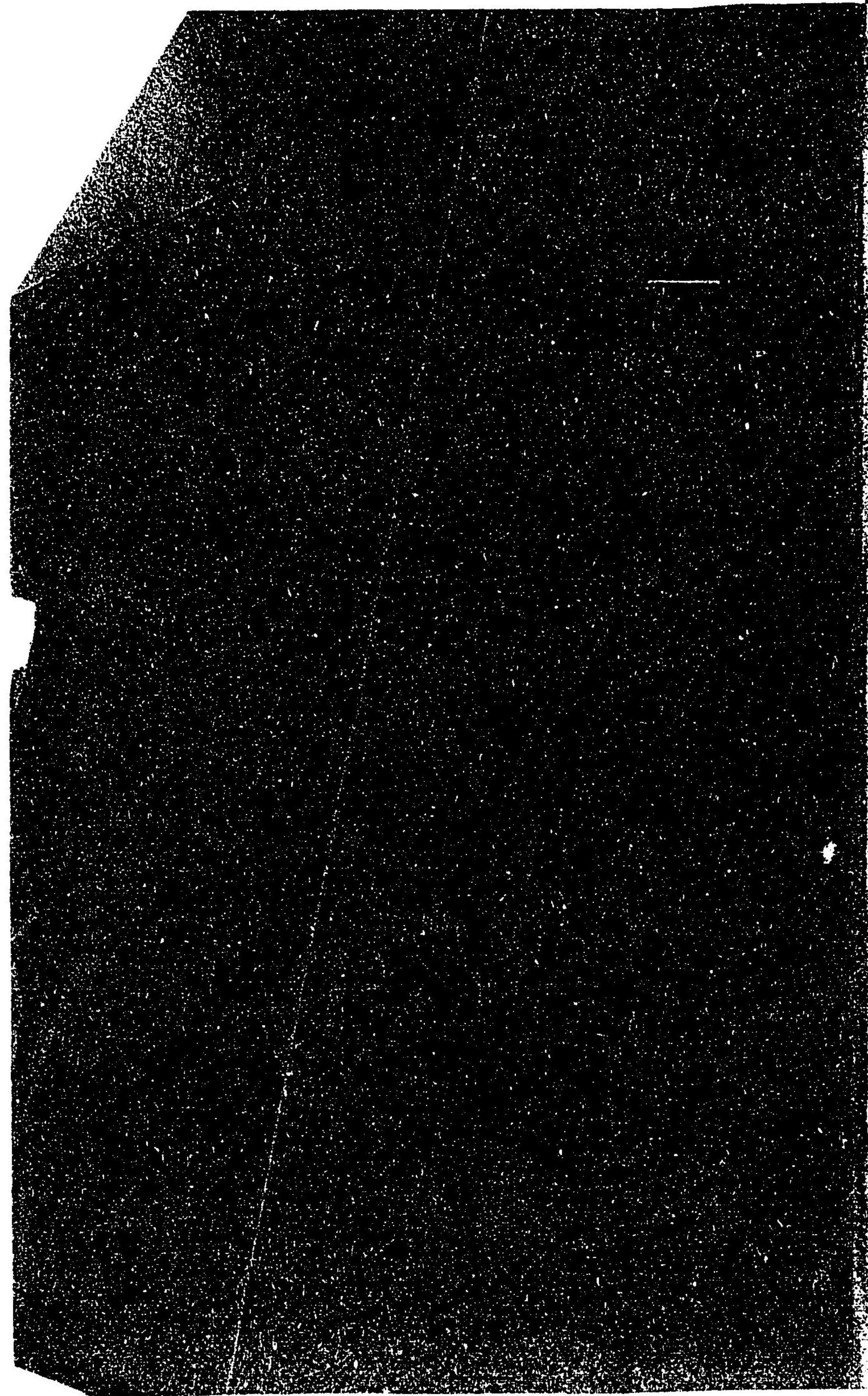
鳥取縣平民 川合清丸  
同所寄留

發賣所

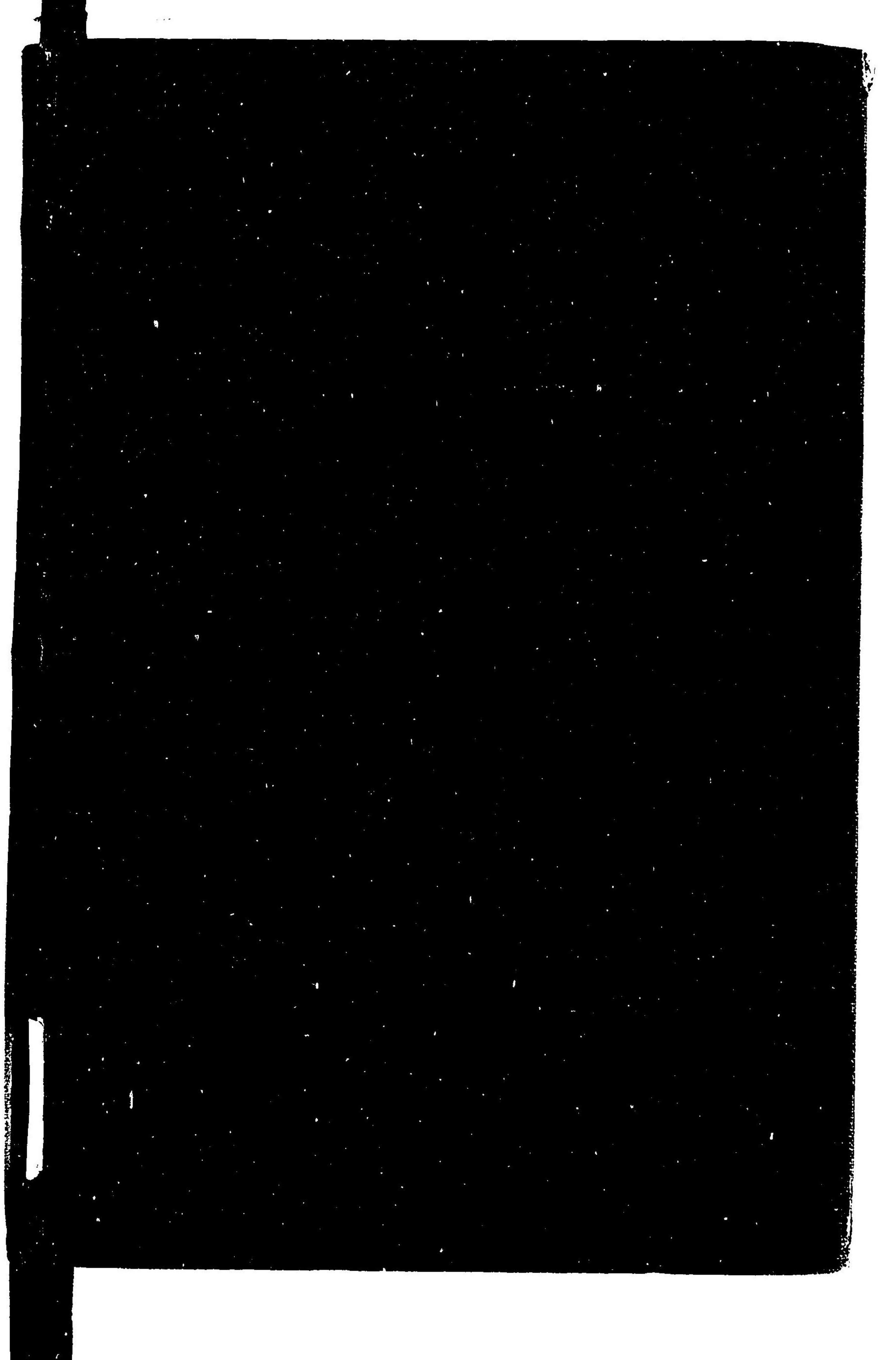
東京神田區雉子町三十二番地 團々社支店  
東京麻布區飯倉五丁目 森江佐七  
東京日本橋區通一丁目 北島茂兵衛  
東京京橋區瀧山町四番地 佛書出版一陽社

各 地 賣 捌 所

西京寺町通松原下	改	進	堂	大阪備後町四丁目	此	村	彦	助				
西京河原町	大	黑	屋	書	舖	神戶元町五丁目	船	井	書	店		
橫濱住吉町	角	田	屋	貞	信州松本	琴	水	堂				
加州金澤尾張町	牧	野	作	平	藝州廣島	早	速	社				
陸中仙臺大町	木	村	文	助	備前岡山西大寺町	阿	部	勝	忠			
陸奥青森大町	柿	崎	忠	兵	衛	甲府常磐町	內	藤	傳	右	衛	門
尾州名古屋本町	片	野	東	四	郎	筑前博多中島	藤	井	孫	二	郎	
同 三丁目	川	瀨	代	助	長崎酒屋町	安	井	與	兵	衛		
勢州津東町	淺	野	東	助	函館末廣町	種	勘	七				



23  
57



23  
57

013773-000-8

23-57

無神論 (真正哲学)

鳥尾 小弥太 / 著

M20

ABA-0263





